



技術と情熱でモビリティの可能性を拡げる

フェロー 高橋 哲哉

小学生の頃、初めて行った東京モーターショーで買ってもらった自動車ガイドブックをほぼ丸暗記して、ガードレールに腰掛け、通りを走り過ぎていく自動車の排気量や馬力を当てるのが好きでした。そして習いたての自転車に跨り、自らの力で見知らぬ街まで遠出することが、その頃の私には大冒険でした。

時は流れ、3歳になる孫は、おもちゃ箱をトミカや機関車トーマスで一杯にし、外に出れば車道や線路を歩き交う車や電車を指さしては嬉しそうに眺めている姿に、なんだか昔の自分を見ているようで、ほのぼのとした気持ちになります。

「Mobility (モビリティ)」とは、いうまでもなく自由な移動や交通手段のことを指し、人間の普遍的な欲望とも言えます。幼少期から成長するに従い、その行動範囲が広がっていきました。新しい場所に行き、異なる文化や環境に触れることで知識や経験が豊かになってきました。そして行く先々で、心に響いた感動の積み重ねこそが自らの人格形成に大きな影響を与えてくれたと我ながら回想しています。

100年に一度の変革期を迎えた自動車業界。持続可能なモビリティの実現には、2050年カーボンニュートラル目標達成と共に、循環型社会(サーキュラエコノミ)との両立も重要となってきており、ジャトコも全方位で新たな価値創造に取り組まなければなりません。

すなわちバリューチェーン全体を視野に入れたCO₂削減努力に加え、設計段階から材料や工法を工夫しリサイクルやリユースを容易にしていくなど、資源の再利用を前提とした循環プロセスへの転換が持続可能な企業にとって必須となってきています。そんな中、自動車用変速機の再生事業(リマニュファクチャリング)を通じ、根付いてきたジャトコにおける「MOTTAINAI(もったいない)」文化は、アドバンテージの一つだと思います。

一方、環境にやさしい移動手段と言われている電気自動車(EV)は、そのエネルギー源である電力構成を再生可能エネルギー(風力、太陽光発電など)にシフトさせていかなければカーボンニュートラルの達成は困難です。自動車用電動ユニットの開発生産に加え、持続可能なモビリティの実現に不可欠ともいえる再エネ事業にも、ジャトコはそのモノづくり力を活用し、積極的に参画していく必要があると考えます。

また電動自転車の普及など移動手段の多様化と共に、都市部の交通システムの改善として期待されているカーシェアリングやライドシェアリングプラットフォームの普及は個人所有の車を減少させ、リソースの効率的な利用を促進します。これにより車両寿命が延び、資源の浪費が減少する一方、車両管理や整備の簡素化など、アフターサービスの事業形態も大きく変わっていくはずであり、その分野においてもジャトコにおける自動車用変速機の市場品質保証のノウハウが活かすことができるでしょう。

モビリティを取り巻く環境は社会構造そのものの変革を生み、技術革新のみならず、バリューチェーン全体をとらえた新たなビジネスモデルへの発展にも影響を与えていくこととなります。

自動車用変速機のグローバルサプライヤとして成長してきたジャトコは、今まで培われてきたモノづくり力を活かし、こういった変化に迅速且つ柔軟に対応し、持続可能なモビリティの実現に貢献していくことが必要です。

ジャトココーポレートパーパス「技術と情熱でモビリティの可能性を拓ける」のもと、人間の普遍的な欲望を満たしつつ、社会や環境への影響も考慮しながら、子供たちの豊かな人生と未来の夢の実現につなげていきたいですね。